
キノコとようせい！

まいまい？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キノコとようせい！

【Nコード】

N1191P

【作者名】

まいまい？

【あらすじ】

妖精は旅に出た。森に住んでいた食べ物（魔物）をあらかた食べつくしてしまったのだ。だから食べ物を求めて、相棒である走鳥と共に旅立った。そこで、魔物を食う妖精は魔物を倒す勇者と出会う。

世界では魔物が増えていたのだ。勇者一行はその原因を探るため魔物たちと戦っていた。

「勇者についていけば食べ物に困らないかもしれない」と妖精は思い、彼らについていくことにした。

1話200字で書いているので、さく々と?読めます。

1・森の中の妖精

真つ赤なきのこは、白い斑を散らし、木の陰でひっそりとたたずんでいる。

そのきのこが突然揺れ、鮮やかだった紅が茶に変色し、萎びていく。

「こんな小さなきのこじゃ足りない」

そのきのこの陰から小さな生き物が現れた。それは妖精と呼ばれている種族だ。

「もうこの森は駄目だな。おいらの腹を満たせる物がないや」

この森で食料になる物は、あらかた食い尽くしてしまったのだ。

「よし！ 旅に出よう」

こうして旅立ちを決意した。

2・魔物を食う妖精

「ごはん、ごはん、おいしいごはん♪」

妖精は先ほど手に入れた食料をほおばっている。ほおばると言うよりも、吸っているといったほうが正しい。

「やっぱり、魔物はうまいね」

そこにあつた巨大な体は霧と消え、小さな体の妖精の中へ消えていった。

この妖精は魔物を構成している『魔素』を食べているのだ。この妖精の食欲にかかれば、どんな恐ろしい魔物であっても狙われたら最期、あっという間に魔素を吸われて消えてしまうのだ。

3・妖精の友人兼使い魔

「空はこんなに青いのに、それでも、おいらの腹はみたされぬ」

「コキラは、あんな量をよく食べれるよね」

コキラの友人兼使い魔である走鳥は、背中で空を見上げているであろう妖精に語りかける。

怪我をして大量の魔素まみれて死にかけだったこの鳥の魔素をコキラが食べつくして、結果的に命を救って以来、契約を結びずっと一緒にいる。

「カノシタが食べなさすぎなんだよ」

妖精はまだ空を見上げていた。空はどこまでも青かった。

4・この世界は、魔力で満ちている

魔力が消費されるとその副産物で魔素ができる。魔素は魔力を持つものを蝕む毒で、怪我等で魔素が入り込むと大半の生物は弱る。

しかもこの魔素と言うのが曲者で、魔力を持つ種族の中で魔素を感じることができ、耐性があるのは唯一妖精のみなのだ。

妖精がいると病にかからないと言いつ言い伝えがあるが、それは妖精が魔素を食べているからに他ならない。

しかし、人里へ行くような妖精は少ないので、その事実ほとんど知られていない。

5・妖精の役割

大気に放出された魔素は妖精や植物が浄化し魔力に変換する。しかし変換できなかった過剰分の魔素は、いつしか集まり魔物となる。魔素の塊である魔物は、人間などが倒せば一旦大気に溶けるが、再び集い魔物になってしまう。

この妖精の、時には魔物をも喰らう力のことを知ったら、人は世界最強の捕食者と呼ぶだろう。しかし、魔物を食べられるほどの食欲を持った妖精は数えるほどしかいないので、その事実もほとんど知る者はいない。

6・魔物に襲われている人間を見つけた

小さな愛くるしい妖精であるコキラは、その外見とは異なり、その食欲はかわいらしいものではない。時には、魔物を一口で喰らうてしまうほどに、世界一の食欲を持つと言ってもいい。

「あ、誰かが、魔物に襲われているね。助けないとね」

もちろん「助ける」と言うのは、ついでの目的ではない。

「いただきます！」

いつものように、コキラは手を合わせた。魔物に触れると、そこから魔物は霧と化し、コキラはそれを一飲みにする。

7・妖精は人間に話しかけた

「ま、魔物が消えた？」

人間たちには、魔物が消えていくようにしか見えなかったのだ。

「だいじょうぶだった？」

「よ、妖精？」

そして、突然目の前に現れた謎の妖精に、目を丸くした。

「魔物はね、おいらがやつつけたよ」

「き、君が？ あの中級クラスの魔物を、一瞬で？」

「中級だろうと、上級だろうと、おいらにとっては、魔物は魔物でしかないからなあ。よくわからないや」

「そういうものなのか？」

「そういうものなの」

8・妖精が使う回復魔法

「それにしてもひどい怪我だね」

コキラには彼らの体内にたくさん魔素が入り込む様子が見えた。

「おいらにまかせて」

傷口から魔素を吸い、魔素が浸入しないよう魔力を泡で傷口の保護をする。こうすることで回復を早めることができる。妖精族特有の魔法のひとつである。

「応急手当てだけだね」。町の医者なり回復師なりにちゃんと診てもらってね」

「あ、ありがとう」

リーダーらしき青年はお礼を言う。

「どういたしまして」

9・自己紹介タイム

コキラの魔法により、多少体力が回復した人間たちは口を開いた。

「俺はイグチ。ここのリーダーをやっている」

「あたしはミカサ。こう見えても魔法が得意なのよ」

「私はオウギ……」

「オウギは無口だけいい娘なのよ」

彼らは口々に、自己紹介をした。

「おいらはコキラ。そしてこの鳥はカノシタだよ。よろしくね」

人間には鳥の言葉はわからないので、コキラが代わりに紹介する。

「コキラに、カノシタか。こちらこそよろしくな」

10・魔物を食す妖精

「コキラちゃんが、あの魔物を倒してくれたのよね？」

ミカサは、この小さな妖精が魔物を倒したということが、どこか信じられなかったのだ。

「うん、おいしくいただいたよ」

「いただいた？」

意外な回答にイグチが聞き返す。

「うん、食べたの」

「妖精は……魔物を食べるのか？」

オウギが興味深そうに尋ねる。

「魔物を食べれる妖精は、片手で数えられる人数もいないんじゃないかな。おいらは魔物が大好物な変わった妖精なの」

11・きのこは、魔素をため込む性質がある

「おいらの知り合いはみんな、きのこ1個で満たされるほど小食なんだよ」

妖精がきのこがため込んでいる魔素を食べているとは、人間たちは思いもしないだろう。

「そ、そうだよね。妖精さんはきのこが……それから果物とか花の蜜を吸っていいそうだもの」

ミカサはほつとしたように言った。

この人間もまた妖精について幻想を抱いている、とコキラは思った。

「とにかく、おいらが変わっているだけだから、その印象は大切にしてくれ」

12・せかいをすくう、ゆうしやさま、ごいっしゅう！

その人間たちの話によると、近頃凶悪な魔物の数が増えてきているらしい。魔王が現れたとか、世界が崩壊に向かっているとか、様々な噂が流れている。彼らは、その原因を探るための旅をしているらしい。

「いわゆる、ゆうしやさまってやつだね。すごいね」

「まだ、何もしてないんだけどね」

「おいらたちのせかいをすくうの、がんばってね」

あどけない妖精に言われ、3人の人間たちは再び自らの使命に身をささげる決意をした。

13・妖精は、事実を教えない

「昔に比べて魔力を大量消費するようになって、浄化しきれない魔素が集まって実体を持った魔物になっているのだけは、確かだね」

「それ教えてあげないの？」

「教えたところで信じないと思うよ。魔素と言う、見えないものなんては信じたくないだろうから」

妖精以外の種族は、魔力は感じるが魔素をまったく感じないのだ。説明が面倒なだけでしょ」

「それもあるけれどね。ま、おいらとしては、食料が増えるから大歓迎なのだ」

14・妖精のたくらみ

（もしかして、この人間たちについていけば、食料に困らないかも）
妖精は基本的に、欲に忠実なのである。

「おいらもつれてっ」

「でも、コキラちゃんを危険な目に合わすわけには……」

「魔竜みたいな濃厚な魔物とか、ものすごい集団でもない限り、たいていの魔物はすばやく簡単に食べるよ」

「濃厚の意味が分からないが……」

「魔竜は、ちょっとクセが強くてね」

「……ていうか、食べたことあるの？」

「100年位前かな」

15・妖精の一生

「コキラは、一体いくつなんだ？」

「そうだな、印象に残っている古い記憶は……南大陸の焼失事件かな」

人間の世界ではその出来事は、もはや神話時代の話である。

「妖精って、何年生きるの？」

「さあ、死んだことがないから、何歳まで生きるか分からないね」

「……そういえば、数年何も食べないでいたら、いつの間にかいなくなっちゃった妖精はいるって聞いたことがあるなあ」

コキラは腕を組み思い出したようにこう言った。

16・利害の一致

「ま、なんと言つか、おいら一人で魔物を探すよりも、楽なんだよね。それに君たちといれば、いろいろ楽しそ」

コキラは、羽の鱗粉を散らしながら宙をくるりと舞った。

「あと、さっきみたいにちょっとした怪我とか、毒でしびれた時には、応急手当できるよ」

人間に物を頼む時は、利益になることをチラつかせると成功しやすいと言つことを、コキラは知っている。

「……そうね、あたしの魔法やオウギの薬草だけじゃ、心細いしね」

17・使い魔契約の便利な機能

「危ないときは、逃げるか隠れるかするんだぞ？」

「もちろん、わかってるよ」

「そっちの鳥ちゃんもね」

カノシタは「もちろんだよ」と言うように「くえ」と鳴いた。

「でも、本当に危険なときは、カノシタは森に還すから大丈夫だよ」

「僕は戦闘向きじゃないから、そうしてくれた方がうれしいね」

「使い魔の契約をしているのか？」

「うん、してる」

好きなときに呼び出し、好きなときに還す、使い魔契約の便利な機能なのである。

18・町へ行こう

コキラが応急の処置をしたので、3人の人間たちは少し休むと、歩けるくらいに回復した。

「とにかく町へ戻って、今後のことを考えよう」

「そうね。日が暮れる前には着きたいわ」

「ここからだ、西にある町が一番近い……」

オウギは地図を広げ、方角を知る計器を片手に持ち、西に目を向けながら言う。

「そうか、それじゃあ、そろそろ向かおう」

こうして人間と妖精と走鳥という変わった組み合わせの一行は、町を目指すことになった。

19・妖精と走鳥の道中コント

「おいら、人間の村は久しぶりだ」

「僕は、初めて……」

野生の生まれであるカノシタは、人の多いところには行ったことがないのだ。

「びつくりして、暴れないようにね」

「そんなことしないよ……」コキラじゃあるまいし」

「おいらが暴れるのは、お腹がすいたときなのだ」

「いつもじゃん」

「だから、驚いたくらいじゃ、暴れたことにならないのさ」

そう言つて、コキラはカノシタの背中に乱暴に飛び乗った。

「……何気に、ひどい」

20・町に到着

「おいら、町の探検に行ってくる」

一行は宿に着いて、おのおのの作業をしていた。しかし、荷物のないコキラはすることがなかったのだ。

「あたしも一緒に行こうか？」

「ううん、大丈夫。ミカサは、自分の事をして」

「僕は留守番。今日は疲れたから」

はじめて見る町の、たくさんの人に少し疲弊したカノシタは部屋の隅に用意された籠で休むようだ。

「じゃ、行ってきます」

「気をつけるんだぞ」

イグチはそう注意した。

「はい」

21・町並み拝見！

そんなわけで、コキラは一人で町へ探検に出かけた。

久しぶりの人間の町は、昔見たときとはだいぶ様子が変わっていた。記憶の中では、彼らは鉄を溶かす技術を得たばかりだったはずだ。

「人間って奴は、自ら切り開く力があるからすごいな」

「あ、妖精！」

町で妖精を見かけることはあまりない。自然と人間たちの目を惹いてしまう。

「なんだか視線がくすぐつたいな……」

コキラは人目を避けるように、人気のない路地へと入っていく。

22・妖精は高く売れる

妖精は知らない。最近の人間の町を。

表の通りはそれなりに治安がいいが、裏の通りは時には危険がいっぱいだと言うことを、妖精は知らない。

「珍しい、あそこにいるの妖精だぜ。これは、高く売れるぞ」

と、そう言う声が聞こえたと思ったら、目の前が暗くなった。どうやら、袋の中に入れられたらしい。

「あらら、これは誘拐ってやつだね」

閉じ込められたというのに、コキラは落ち着いている。

「おいらとしたことが、油断したな」

23・妖精は閉じ込められない

「しかし、こんなの『閉じ込めた』に入らないよ」

光がほんの少し漏れる使い古された匂いのする麻の袋の中でコキ
ラはささやいた。

「隙間が小さいから通り抜けられない？ 瓶のふたをして密閉すれば出られない？ そんな間違いだよ」

妖精はそれら物質でできた物では捕らえることができないのだ。

「おいらたちについての知識があんまりないんだよね、人間って」
その袋が、魔法の力を帯びていたのならば少し話は違っていただ
ろうが。

24・再び別の集団があらわれた

「この雰囲気は……またか」

先ほどの場所から逃げ出したのはいいものの、また似たような集団に出会ってしまった。

「しつこいな、もう……」

コキラはうんざりしていた。

「あんまり高く飛ぶと、鳥に見つかるしな」

それらの鳥に捕まった場合、かなり遠くに運ばれてしまう可能性がある。

「やんちゃな鳥には悪意がなくて、ただ遊び相手として欲しているだけに面倒なんだよね」

コキラは人間たちの方をうまく片付けることにした。

25・そして、捕まった。

羽の鱗粉を散らしながらコキラは懸命に逃げていた。

何度か路地を曲がった時、飛ぶスピードが緩んだ。

「捕まえた」

その隙を逃すはずはなく、コキラは捕らえられてしまった。

「これで『捕まえた』だって？ どっちが『捕まる』のかよく見て
ごらんよ」

そう言つと息を吸い、抑揚のない声で叫んだ。

「たゝすゝけゝてゝ」

「そんな声じゃ、助けは来ないぞお」

「はたしてそうかな」

コキラは悪者の手の中で、笑みを浮かべているだけであつた。

26・妖精はつかまらない

「そこで何をしている!」

背後から警備員が現れた!

「な、いつの間に?」

「いつの間につて……彼の目の前でおいらを捕まえたのは、間違いなくお前たちなんだけれど」

この人間たちが周りの景色を見えなくなるように、ほんのちよつと感覚を惑わしていたが。

「さあ、こっちへ来い」

「ちくしょう。離しやがれ!」

警備員の前行われた犯罪では、言い逃れはできない。悪者は捕えられた。

「大丈夫だったかい?」

「うん、ありがとう」

27・実は、少しお腹がすいていただけなんだ

「なぜ町に？」

「おいらは今、人間と一緒に旅をしているんだ」

コキラはこの町に來たいきさつを話した。

「では、その宿まで送ろう」

「ありがとう」

「妖精よ、これからはその仲間と町に出るようになるんだぞ」

「うん、わかったよ」

そして、コキラは去っていく警備員にたまっていた魔素をこっそり食べた。

その警備員が自分の体調が良くなっている事に気がつくのはしばらく後だが、それは妖精の恩返しではないかと思うことだろう。

28・妖精はドアから入らない

(一人で出歩くと、あんな面倒なことになるから、これからは仲間と出ることしよう)

そう思いながらコキラは、宿の窓から部屋へ入った。
「ただいま」

「おかえりなさい……」

部屋にはオウギとカノシタだけがいた。

「あれ、他の人は？」

「町へ出たよ」

「ふゝん。オウギは留守番？」

「私は人の多いところは苦手だね」

「カノシタと一緒にだね」

「……そうか。カノシタと一緒にか」

オウギは、部屋の隅で夢の中にいるカノシタを見つめた。

29・狩人と走鳥（オウギ視点）

カノシタは、籠の中で丸くなって休んでいる。

この大きさは、まだ子供だろう。あと数年もすれば、子供を乗せることができるくらいに成長するだろう。

（私は森の民。カノシタは森に住むもの。同じ森で生活をするという点で親近感も沸く……）

あの妖精とこの走鳥が知り合った経緯は分からないが、使い魔契約を結んでいると言うことは、それなりに深い絆があると言うことなだろう。

その走鳥の主人である妖精は今、私の方を見ている。

30・狩人の髪飾り

「この髪飾りいいね」

コキラは、オウギの黒髪に咲いている銀色の花と葉の飾りに興味を持ったのだ。

「触ってみてもいい？」

「いいよ」

コキラは触れてみる。案外丈夫な作りである。

「（……なんか座りやすそう）座ってもいい？」

「……いいよ」

少しの沈黙の後、オウギはそう答えた。

「ありがとう」

（思ったとおりこの髪飾りは座り心地がいい！）

（思ったとおりこの装飾が素晴らしくなった！）

二人はそれぞれに、思いにふけていた。

31・妖精の定位

「おいら、ここ気に入っちゃった。時々座っても良い？」

「もちろん……」

オウギにとつても、この提案は願ってもいない申し出だったのだ。

その日以来、コキラは暇さえあればオウギの髪飾りに座っている。すっかり気に入ったのだ。

「重くないの？」

気になったミカサは、オウギに聞いてみた。

「ほとんど重さはない」

まるで最初から髪飾りの装飾であつたかのように、妖精の羽が美しく風に揺れている。

「これはこれで、良い作品だ……」

32・妖精は眠りたいときに寝て、起きたい時におきる。

カノシタのふかふかの羽毛に包まれて、コキラは心地良く眠っていた。

「……ん、よく寝た」

コキラは窓の外を見た。

時刻は、夕の刻を過ぎた頃だろうか。空は赤く、ほのかに夜の気配に染まっていた。

「まだ、夜にもなっていないのか」

今日は雨だったので、コキラは一日中眠ると決めたのだ。

「……人間たちは、何をしているのかな」

眠りから覚めたコキラはカノシタの羽の間から起き出して、イグチ、ミカサ、オウギ3名の様子を伺った。

33・妖精の記憶にひっかかる何か

イグチはテーブルの上に地図を広げ、ミカサ、オウギと共に、今後の計画を練っていた。小さなテーブルなので、イグチの右手にはミカサが、左手にはオウギがいるような格好である。

「両手に花？　おいらが感じることに、近いけれどちょっと違うな……」

コキラは、部屋の隅で丸くなっているカノシタの背中の上で、人間観察をしていた。

「何だったかな？」

コキラは記憶にまぎれた思い出せない何かを、必死に見つけようとがんばっていた。

34・妖精の余計な一言

「おいらい思ひ出した！　これは、はーれむってヤツだ」
コキラの目に映った男1人に女2人の状況は、まさにそれに近いように感じたのだ。

「な……」

イグチは二の句が継がないでいる。

「どこで知ったのそんな言葉」

ミカサも少しあきれたようにため息をついた。

「おいらは長く生きているから、聞きかじりの知識だけはあるのだ」

「でも……あながち、間違いとは言いきれない」

オウギは誰にも聞こえないような声で、ぽつりとこう言った。

35・妖精の恋愛感覚

「ところで、コキラちゃんは男の子？ 女の子？」

「もしもコキラが女の子ならば、本当にハーレムになりかねない。

「ええとね、おいらたち妖精に性別はないよ」

「え、そうなの？」

「そうなの～。あの人の子供が生まれると思ったたり、あの人に子供を生んで欲しいと思ったら求婚して、交換して、それで3日もすれば勝手に子供たちは生まれて巣立つよ～。それで終わり」

「ずいぶんと、フリーダムなんだな」

「面倒なのは、嫌いだからね」

36・噂を集めよう

妖精が町に来てから数日が経った。町に住む人の間も、コキラが勇者一行の仲間として知るようになった。少しいたずらっ子で、少し世間離れしていて、目が離せないかわいい妖精に、人々はますます妖精と言う生物に幻想を深めていった。

「人間が集まる所って、本当にいろいろな情報も集うんだね」

妖精がいることに気がつかなかったり、妖精がいても警戒が緩むのか普段人前で話さないようなことも聞こえてくるのだ。

「役得、役得」

37・妖精は地獄耳？

実験に失敗して髪が爆発したという失敗談から、町で一番金持ちである人物の性癖情報まで、コキラは様々な噂を入手していた。

もちろん、そんなどうでもいい情報に混じって、魔物の被害状況についての話も聞こえてきた。

「ふむふむ、本当にあっちこっちで魔物の被害増えているんだね。イグチたちも色々聞いて回っているみたいだし、片っ端から魔物を食べに行こう」

コキラはまだ見ぬごちそうを思い浮かべては、心が躍るのだった。

38・魔物の住む森へ

「今回は、一番被害が大きいと思われる東へ行こうと思う」

皆が集めてきた情報をまとめ、リーダーのイグチが次なる目的地を発表した。

「普段は森に身を潜めているような魔物が、最近一通りの多い往来にまで出没するようになって、行商人の人たちが困っているってやつだね」

「よく知っているわね、コキラちゃん」

「うふふふ、おいらは噂話たくさん知っているもんね」

こうして、魔物が増えていると言う森周辺へ向かうことになった。

39・これが彼らのコンビネーション！

「予想以上に魔物の姿が見えるな」

森に近づくにつれ魔物が増えていく。

イグチは剣を振るい、オウギが弓で援護し、ミカサがとどめの魔法を繰り出す。これが彼らの戦闘スタイルらしい。

「んゝしあわせ」

人間たちが必死に戦っている時、コキラはただただ魔物をおいしくいただいていた。

「なかなかやるじゃん」

コキラが彼らと出会った時、魔物にやられてボロボロだったので、駆け出し冒険者と思っていたが、実力はなかなかのようだ。

40・対魔物魔法の意外な欠点

「魔素が見えない者たちは、魔法で魔物が倒せるように見えるから、嬉しくて仕方がないんだね」

魔法は魔力が集まって発生し、魔物とは相反する性質を持つ。魔物と魔法がぶつかれば魔法も魔物も形を成すことができなくなり大気に四散する。その現象がまるで魔物を倒したかのように見えるのだ。

しかし、結果的には魔法を使う時に出る魔素分だけ、世界に魔素が増えていることを、彼らは知らなかった。

「でも、これも一つの自然の摂理」

41・妖精は、はりきっている

森は何事もないかのように、深い緑をたたえ静まり返っている。

「おいらの住んでいた森とあんまり変わらないね。魔物が出るということ意外は」

コキラの住んでいた森の魔物は、この小さな妖精がすべて食べつくしてしまったのである。その森が魔物で満たされるにはしばらくかかるのだ。

「食べつくさないよう、ほどほどにしないとね」

この規模の森ならば、3日ほどで魔物の姿が消えてしまうだろう。それほどこの妖精は食欲旺盛なのだ。

42・妖精は、がっかりしている

森は魔物の巣窟とっていいほど、異様な気配に覆われていた。

「また、魔物か！」

茂みから1匹の魔物が飛び出してきた。その何の変哲もない異形を見て急にコキラの表情が曇る。

「……あれは魔物じゃないね」

「どうということ？」

「誰かが、作った魔法生物ってことだよ」

「魔物とは違うの？」

「ぜんぜん違う〜おいしくない〜」

彼らにはあの魔物と普通の魔物の違いは、まったく分からなかったが、妖精にはその違いが分かるらしい。

43・魔物と魔法生物

「魔法を使うミカサなら分かると思うんだけど、よく観察してみると魔物は体の周囲の魔力がゆがんでいるんだ。でも、あれは体中でその生物自体の魔力がゆがんでいる。似ているようで全然違うんだ。あれは魔物に似せた魔法の生物だ」

魔素が見えない者でも、魔物ほどの高濃度になれば周囲に魔力のゆがみが見られるので、分かる人にはわかるのだ。

「ああ、なんとなく分かったような気がするわ」

ミカサは、早速違いを見つけたようだ。

44・食がかかっているからね

「こんな事を知っているなんて、コキラってすごい！」

ミカサは、新たな知識が得られたので興奮気味に話している。

「まあ、おいらにとつては、食料の問題だからね。人間にとつては、魔物と魔法生物は区別しなくても、生活には困らないだろうからね」

「……いや、魔物だろうと魔法生物だろうと、それらがいれば生活には困る……」

オウギはもつともなことを言う。

「あは、そうだったね。襲われ荒らされたら生活できないものね」

45・妖精の苦手な食べ物

「じゃあ、あれはやっつ……いや、食べられないんだな？」

イグチは確認をとる。

「うん。おいしい部分はほとんどないし、まずいからおなか壊しそうです」

「じゃあ、あれは俺たちが何とかするしかないな」

「ま、あの魔物の動きを鈍くするとか……君たちが怪我したら、応急手当してあげるけどね」

「それでも、十分ありがたい」

「えへへ」

「それじゃ、みんないくぞ！」

その掛け声とともに、おのおの動き出し、あっという間に倒した。

46・魔法生物の住む森

森を探索したが、とりわけ変わったところは無かった。ただ、コキラの言うことが正しければ、この森には作られた魔物が多いこと。むしろ、最初の数匹以外はすべて魔法生物だったと言って良いらしい。

「もともとこの森にいた魔物が、追い出されたって感じだね……」
カノシタが言う。

「そうだね。森からあふれた魔物がこの周辺をうろついて人の目に付くようになったんだね」

コキラはため息をつく。

「……にしても、迷惑な話だよね」

47・自己中妖精、世界を救うと決めた！（コキラ視点）

最近魔物が増えているって言うけれど、あんな人工的なやつも増やされたんじゃない。

見つけたと思った魔物が養殖でしたじゃ、おいらのおなかがかわいそう！

おいしいならとにかく、おいしくないあの魔法生物をこの世に放っているやつは、許さない！

世界を救うなんて興味はないけれど、このゆうしゃごいつこうさまに、全面協力しようではないか！

よし、おいしい魔物を食べるために、おいらは頑張るぞ！

おいらはそう決心した。

48・だれかが、何かのために魔物を作っている？

襲い来る者たちを蹴散らしながら、変わったものが何かないか捜し歩いた。

しかし、森に怪しげな場所は見当たらなかった。

「魔物が多いが……普通の森にしか見えない」

森に詳しいオウギが思ったことを言う。

「おいらもそう思う」

「魔法生物が自然発生するとは思えないし……」

ミカサも首をかしげている。

「自然発生するような何かがあつたとか？」

「それはまだ分からないわ。でも、それでも何か痕跡くらいはあつてもいいと思うの」

49・地図を見てみよう

「この森におかしな所がないとなると……」

イグチは地図を広げた。ミカサとオウギも覗き込む。

「森の近くには何もないけれど、この地方には魔物研究の施設があるわね」

この森からさらに東に行くと大きな街がある。その街は学園都市とでも言うのだろうか、様々な研究施設がありその中に魔物を研究する所もあるのだ。

「……怪しい」

「調べてみる価値はありそうだな」

「行ってみよう」

一行はその学園都市と呼ばれるその街へ向かった。

50・学生いっぱい、先生いっぱい

学園都市と言う名にふさわしく、他の町にはない独特な雰囲気があった。

「カヤ先生に会う約束をしたものだが……」

「はい、承っております」

あらかじめ約束を取り付けておいたので、難なく案内された。

魔物研究所と言うには小規模な部屋に案内された。研究所と言うよりは、書物庫といった方がいいだろう。その書物庫にある部屋に魔物について研究している博士がいるという。

「失礼します」

案内人はドアをノックし、その部屋に入る。

51・研究者は語る

案内された部屋も本にあふれ、その中に中年の男性がいた。

「君たちか、魔物について聞きたいと言うのは」

「はい。最近、魔物の活動が活発になっている事について聞きたい
と思います」

「確かに近年そういう傾向があるな。そして魔物が増えたことで、
ほかの生物に影響して、生態系がおかしくなっている……その原因
を私も探しているのだが、正直魔物についてはまだわからないこと
だらけなんだ」

カヤは申し訳なさそうにそう言った。

52・研究者は熱く語り続ける

「先生は、魔物のどういうことを研究しているの？」

コキラは尋ねた。

「動物は死ぬと死体が残る。しかし魔物は死ぬと消える。動物と魔物とでは何が違うのか……魔物が何なのか、何か我々が観測できない何かで構成されているのか、しかしそれは仮説でしかない……」

カヤは熱く熱く語っている。

「……おおと、語りすぎてしまったな、すまん。妖精ちゃんには少し難しかったかな？」

「うっん、大丈夫だよ。貴重なお話をありがとう」

53・妖精は研究者の味方です？

「魔素のこと、教えてあげないの？」

「んゝ面倒だなゝ。『何か我々が観測できない物質があるのでは』という読みはいいけれど、その物質が魔力消費と関係があるかもしれないという仮説に考えが到達した人でない限りは、多分理解できない話になるだろうし。それに人から聞くことよりも、自らの手で発見してこそ喜び、研究者ってそういうものだよ。だから、何も教えないおいらは、やさしいでしょ？」

「そういうものかな……？」

54・捉え方の問題

「だって、君も理解してないじゃないか。魔力が魔素に変わる仕組みとか、おいらたちが魔素を取り込み、いかにして魔力に変えているのか」

「ああ、妖精には何とかっていう器官があつて、光と水と魔素で何かして、魔力にするんだっけ」

「ほら、半分も理解してないし。おいらたちは、魔力をつくることが目的ではないの。魔力はあくまで副産物、おまけでしかないの」

「……やっぱり、分らないや」

カノシタは首を傾げるだけでした。

54・捉え方の問題（後書き）

ぶっちゃけ、妖精たちは光化学反応で、いろいろやっているわけです。

植物が葉緑素で二酸化炭素を酸素にするように、妖精も魔素を魔力にするのです。

しかし、植物にとって光合成でつくる酸素は副産物でしかなくて、
本当の目的は、でんぷんとか栄養をつくることだということを忘れがち。

55・あやしいものがたくさんある部屋

コキラは、カヤがイグチたちに魔物について熱弁をふるっている間に、こっそりと色々見て回った。しかし、たくさん妖しい物は見つけたが、欲しい情報につながるような怪しい所はなかった。

「カヤって人からも、変な魔力の残滓は感じられないし、あの魔法生物の件とは関係なさそうだな」

怪しい施設ではあったが、純粹に研究しているだけのようだ。彼は純粹に魔物の生態を解明したい単なる探究心の塊で変わり者と言うことだろう。

56・紙の業は神の技

イグチたちは、カヤを信用しあの森で起こっていた話を話した。

「増えているのは魔物ではなく魔法生物だと……ふむ、興味深い話だ」

魔法生物は専門外だと言われやしないかと心配だったが杞憂だったようだ。

「魔法生物、魔力の塊？　そういえば気になる情報が、この辺にあったはずだ……」

カヤは机の上に積み重なっている書類の山から、崩さないように器用に1つの束を引き出した。

「おお、すごい紙業だ」

コキラは感嘆の声を上げた。

57・魔物が増えたという場所の共通点

「魔物の情報を集めていて分かったことなのだが、魔物が増えたところは総じてフェアリーステージの力が弱まっているのだ」

カヤは手に取った報告書をぱらぱらとめくり、その中から目的の記述を探している。

「フェアリーステージ？ ……それは妖精の踊る場所か何かなのか？」

イグチは聞きなれない言葉に首をかしげ、コキラの方を見ている。
「実際には、おいらたちはそんなところで踊らないけれどね」

コキラはにやりと笑みを浮かべた。

58・魔力にあふれた場所

「フェアリーステージっていうのはね……なんか力がわいてくるところ！　おわり」

「え、それだけ？」

イグチは拍子抜けた。

「もう、コキラちゃんたら簡単に話しすぎよ。まあ、確かに説明は難しいわね。魔法を使っても疲れにくくなる魔力にあふれた不思議な所かしら」

「古い言葉だと精霊のゆりかごともいわれている……」

「おお、さすが魔物を追っているということだけのことはあるな」
カヤは感心している。

「知らないのは、俺だけか」

59・妖精は踊らない

「それでは、なぜフェアリーステージと呼ばれているか分かるかな？」

カヤは生徒に質問するような口調でそう言った。

「……もちろんです」

オウギはそう答える。

「おいらも知ってるよ」

「妖精ちゃんもすごいな」

「えへへへへ」

「妖精が踊るから……じゃないって言っていたわよね？」

魔力の濃度が濃い場所と言う認識しかミカサにはなかった。

「俺は、名前のまんま妖精が踊るからだ」と

イグチはもともと魔法関連の知識に疎かった。

60・フェアリーステージとは何か

「フェアリーステージからは、精霊が生まれるのです」

カヤは、これは重要だから覚えておくようにと言わんばかりの覇気で言う。

魔素が自然に集まったものが魔物であり。同じように魔力が集えばそれは精霊となる。両者の違いは、魔物は破壊を、精霊は癒しをと言っくらいだろつか。

「精霊が生まれる？」

「そうだよ。生まれたばかりの精霊って妖精に似ていて、まだ不安定だから踊っているように見えるんだよ」

「その妖精の言う通りだ」

61・フェアリーステージの力が弱まった理由とは？

「魔物が現れたからフェアリーステージの力が弱まったのではなく、魔法生物を作るのに使われているとしたら？」

カヤは己の立てた仮説を述べた。

「そういえば、あの森もフェアリーステージがあったわね。かなり弱いものだったし大なり小なりいたる所にあるものだから、見落としていたけれど」

「……あの森のフェアリーステージは、不届き者のせいで弱った状態だったのか」

オウギは森に住む民として生態系を乱すものは許せなかった。

62・悪用されるフェアリーステージ

「君たちが言っていたその森も、魔法生物が生まれるまではそれなりの場所だったと思われる。何者かが魔法生物を生むために魔力を使い、よくあるようなフェアリーステージ並みになっただけで

……」

カヤは説明を続ける。

「フェアリーステージが、魔法生物の媒体として何者かに悪用されているならば、それを阻止しなくてはならない。強力なフェアリーステージがある場所が怪しい。そこを調べていけば何かに行き着くかもしれない」

63・狙われているフェアリーステージ

「精霊使いがいれば、不穏な動きのあるフェアリーステージを知ることができるが……」

フェアリーステージの場所や状態を詳しく知っているのは精霊だけなのだ。

「もしかして、敵に精霊使いがいるかもしれないと言うこと？」

「それはないな、精霊が協力するとは思えない」

「案外、地道に探しているのかもよ？ 魔力感知能力が高い人がいればすぐにわかるし」

「この街にも、何人が精霊使いがいる。私の知り合いでよければ紹介しよう」

64・精霊ちゃんがかawaiiそう！（ミカサ視点）

あたしは、カヤやコキラの話を聞いて心を痛めていた。

「かわいそうに……」

生まれるはずだった精霊の力を奪ってあんな恐ろしいものを作るなんて。

コキラちゃんが言うには、精霊が生まれる力が再びたまるまでに数百年遅れる程度と言っていた。

本当ならば、あと少しで生まれることができたはずなのに、悪い人間の都合で、また数百年も待たなくてはいけないなんて……

「許さない！」

悲しみの感情は、いつの間にか怒りに変わっていた。

65・魔物と精霊とキノコとフェアリーステージ

「ねえ、カノシタは知ってる？ 魔物側にも生まれる場所のような所があるんだよ」

「え、そうなの？」

「例えば毒キノコの密集しているところ」

キノコの毒は魔物の元なので生物に害をなすのだ。

「魔素の集合体の魔物と魔力の集合体の精霊は両極端にある同質の現象だからね。似たようなことがおきるんだよ」

「じゃ、精霊を食べる生き物もいるの？」

「数は少ないけれど、どこかにはいるんじゃないの？ そうやって自然は回っているんだし」

66・精霊使いの家へ

カヤはすぐさま知り合いである精霊使いと連絡を取り、今すぐ会えないかと尋ねた。

「彼女は今、家にいるから、いつでも大丈夫なようだ。案内しよう」
カヤの案内の元、精霊使いの家へ向かうことにした。

「フェアリーステージの異変……つまり魔物が増えた場所の力が弱まっていると言うのは、彼女から聞いたんだ」

精霊使いの家に行く道すがら、カヤはそう説明する。

「ここが彼女の家だ」

そして、精霊使いが住むという家の戸を叩いた。

67・部屋に案内される

家から出てきたのは小柄な女性だった。紫色の長髪をゆったりとしたミツアミにし、月のように金色に輝く瞳でまるで人形のような女性であった。

「いらっしやい」

そう言ってその女性は微笑んだ。

「彼女はサクラだ」

カヤは紹介をする。

「ここで立ち話もあれでしょう、中へどうぞ」

促されるまま部屋に案内される。何か香が炊いてあるのだろうか、やさしい香りに包まれていた。

「好きなところに座ってください」

「ありがとうございます」

68・精霊は嘆き悲しんでいる

「さて、カヤから話は聞いているわ。魔法生物を作るために何者かがフェアリーステージの魔力を利用しているかもしれないそうね…

…」

サクラは紅茶を入れている。

「精霊たちは多くを語りません。精霊使いたちは彼らの言葉を感じるしかないのです。私が知ることができたのは、精霊たちが嘆き悲しんでいる事。悪しき獣が我が同胞の安らぎを乱したのだと訴えていることなのです」

一人ひとりにカップを渡しながら、サクラはそう言った。

69・精霊召還をする

「俺たちは、フェアリーステージの場所を詳しく知りたいんです。これ以上被害を増やさないために」

「まだ無事なフェアリーステージとか、フェアリーステージの近くで不審な者を見かけるとか、些細な情報でもいいから、精霊たちに尋ねてほしいの」

「そういう理由であれば、精霊たちも喜んで教えるでしょう」

「今から精霊を召還します」

床に精霊を呼ぶ魔方陣を展開し、サクラは天に掲げ祈りをささげた。

光が集まり、形を成し始めた。

70・精霊は知っている

現われた精霊は、霧をまとったような人型の姿をしていた。

「この子は、大地の精霊です」

精霊はふわりと宙に円を描くように舞い挨拶をする。

「私と心は一体なので、事情は知っています。この子は協力すると言っています」

精霊はサクラに何かさやくような仕草をした。

「最近、人間たちがよく入り浸っている場所があるそうです。あなた方を、その不穏な動きのある場所へ案内するそうです」

「よろしくたのむ」

精霊はこくと頷いた。

71・静かな湖畔の森の陰に身を潜め

精霊の案内でたどり着いたのは湖畔だった。水面に青い空を映し、ゆらゆらと光の粒を散らしていた。

「確かにかなり濃い魔力を感じるわね」

「そうだね」

「湖の中心に浮かぶ島かしら、フェアリーステージがあるのは」
ミカサは魔力の流れをたどっておおよその位置を割り出した。ミカサのその言葉に精霊が頷いた。

「よし、見張るぞ!」

「悪者を懲らしめなくては……」

イグチたちは、そのフェアリーステージが見える場所に身を潜めた。

72・怪しい人影見つけた

「あ、誰か来たよ」

身を潜めて数時間後、二人組の男が現われた。

「計測した結果、このフェアリーステージは魔力の質と量はなかなかいいですね、候補地として合格になると思います。もう少し詳しくこの周辺を調査したら報告しましょう」

「にしても人使い荒い。条件に合うものを探す身にもなってほしいものだ」

「しかし支払われる金額が、すばらしいのも事実」
「そうなんだよなあ」

「やつらを捕まえてアジトの場所をはかせよう」

73・悪者を捕まえる

イグチたちは作戦を立ててすみやかに行動にうつした。

「な、何だ。おまえらは！」

二人組の男は抵抗する暇も無く捕らえられた。

「お前たちを雇っている者はどこにいる？」

「誰が言うか」

どちらの男も言いそうにない。

「おいらに任せて」

コキラは羽の粉を散らしながら男たちに近づいた。

「妖精に話すことなんて何も無い」

「そんなこと言っているのかなあ？」

コキラは二人組の男にささやいた。悪魔のささやき、悪魔の取引である。

74・妖精は惑わすモノ

「おいら、こんなイイモノ持っているんだけど……」

コキラが羽を揺らすと、その手に小さな石が現われた。こついう人間は金目の物で釣るといい。

「こ、これは！」

妖精の果実と言われる貴重な宝石である。

「妖精のおいらが持っているから、真正正銘の本物。情報料としては十分だよねえ？」

コキラは笑みを浮かべて男たちを誘惑する。
欲に目のくらんだ男はすべてを話した。

「夢から覚めたら、すべて幻」

「コキラって悪魔だな……」

75・強行突破しかない！

「まわりは全部高い壁で囲まれていて、上には電流の流れる有刺鉄線が張り巡らされていた。入れるところは、あの門しかない。入り口に見張りが2人いる」

偵察に行っていたオウギがそう告げた。

「この際、見つかってもいいから、強行突破かしら」

「それしかなさそうだね」

「まあ、どうにかなるでしょう」

「いざとなったら、おいらが見張りを惑わせてもいいしね」

そして、2人の見張りに襲い掛かり、あっという間に伸し込んだのだ。
った。

76・妖精は忍び込む

「この扉は、外から開けられるような扉では無いみたいね」
外からではなく中から開けるような仕組みの扉だった。

「おいらが忍び込んで中から開けてこようか？ ついでに、見張りの人たちもかき乱してくるね？」
「いいのか？」

小さな妖精ならば楽に侵入することができるだろう。

「あんまり無理しないようにね？」
「危なくなったら逃げるんだぞ」
「任せておいて」

そしてコキラは有刺鉄線のはるか上空を飛び越え、塀の向こう側へ入った。

77・侵入者はどうどうと！

「侵入者の警報が鳴っている」

「侵入者だ」

「侵入者はどこだ」

警備員たちは、侵入者を知らせる警告に気がつき身構える。

「一体どこにいる」

「見つからない！」

「どこに身を隠した？」

姿の見えない侵入者にあせりの色を隠せない。

そんな彼らの前に、粉を振りまきながら堂々と小さな生き物の姿が現れた。

「妖精？」

彼らの前に現れたのは小さな妖精だった。

「ちがうよ、おいらはただの曲者だよ」

そうこの小さな妖精が侵入者だった。

78・床が熱くなる魔法を使う

「すっごく熱く熱くなあれ」

コキラは魔法を使った。それは床が熱くなる魔法。

天井付近にいるコキラにはまったく影響はない。被害に遭うのは地につけている者たちだけ。

「両手挙げて、右足跳ねて、左足蹴って、新しい踊りでもしているう？　楽しそうだね」

彼らの自由を奪ったところで、次々に眠りの魔法をかけていく。

コキラは一度に一体にしか眠りの魔法をかけられないのだ。

「てい！」

そして、最後の見張りは眠りに落ちた。

79・ボタンは押すためにある。

「これで、よしっと。案外楽に片付いたな」

それもそのはずである。忍び込んだのが人間であつたならば、よく訓練された見張りたちはそう簡単に負けることはなかつただろう。しかし、まさか侵入したのが妖精だとは誰も予想しなかつたのである。

「開閉のボタンはどれかな」

コキラが門を開くためのボタンを押す。ついでに、いじれる範囲でだが、侵入者を陥れるための罠の電源も切っておいた。

「これで、多少時間は短縮できるかな」

80・培養水槽が並ぶ部屋

コキラは、イグチたち一行と合流した。彼らは警備の者たちを伸しながら進んでいく。

「ここは……？」

一番奥にあるその部屋は薄暗かった。部屋の壁際にはいくつもの不気味に光る巨大な円柱型水槽があり、その中で創りかけの魔法生物たちは誕生のときを待っていた。

ひととき大きな水槽の前に、一人の人物がいた。

「チミたちか、ワシのすばらしい研究を邪魔する輩というのは」
振り返る白衣のハゲオヤジは、不敵な笑みを浮かべていた。

81・部屋の奥にはマッドな白衣おやじ（ハゲ）

「ワシは知る人ぞ知る……」

「知らないな」

コキラは研究員のオヤジの名乗りを遮った。

「だあ、これだから、ガキは！ 名乗らせろ！」

「だって、知らないんだもの。おいらは覚えるつもりはないし、名乗っても無駄だよ」

案外毒舌なコキラであつた。

「ぐ……しかし、ここを知られたからには仕方ない……ちょうど今、廃棄処分しようと思っていたところだ」

名を名乗る機会を失ったオヤジは、失敗作の魔物を大量に、放ったのだつた。

82・大群が現れた！

この施設のどこに隠されていたのだろう、合図とともに現れた異形の数は予想を超えていた。

「みんなに強化の魔法かけたよ」

「ありがとう、コキラ。……とは言えさすがに数が多いな」
イグチは額に汗をかく。

「でも、やるしかないのよね」

ミカサは魔法の杖を握り締め言った。

「……ああやるしかない」

オウギは数本の矢を弓にかけた。

コキラは考える。自分は今、どうしたらいいのかを。
「おいらも少し腹をくくらないといけないな」

83・好き嫌い言ってられない！

「おいらは、あのまずい魔物を養殖しているやつをやっつけるって決めたんだ。だから、今回だけ我慢しよう」

コキラは魔法生物に向かっていった。その結果、形を保っていられなくなり消え去ったり、その場で動かなくなったりと、その大半が戦闘不能になった。

「ああ、まずい。もう限界。3日くらい寝込んでくらくらだよ。まずいものって、すぐおなかに入らなくなっちゃうよね……うう、気持ち悪い。口直しに何か食べたい気分だよ」

84・食べ物の恨みは怖い

「コキラちゃんのお腹が心配だわ」

「食べたのは体を構成している『核』みたいなだけだからね。さすがに、あんなまずいものの全部なんて食べてられないよ」

（あまりにもまずくて飲み込まないで、こっそり吐き出していたとは言えないね。それでも、あれを一瞬でも味わうのは辛かった。対魔法生物用に食らわないでも、核だけを分解できる方法考えたほうがいいな……百年かかってでも、見つけてやる。おいらの充実した食生活のために）

85・最終兵器登場

「なんなんだ、あの妖精は。計算外だぞ。不確定要素にも程があるぞ！」

「お前たちが生んだモノ達は、全部倒したぞ！」
名前を名乗らせてもらえなかった研究員は、追い詰められた。

「くそ！ こうなったら！」

研究員のオヤジは、壁際のレバーを下へ下ろす。

「我が愛しのツキヨちゃん、行け！」

その姿は、まるで巨大なキノコであつた。

「あは、キノコの形している！ あれはすごい。今まで一番、しっかりと構築、制御された魔法生物だ」

86・最終兵器は最凶である

一言で言おう。

ツキヨという化け物は強かった。

イグチたちも弱いわけではないが、この怪物は格が違っていた。まさしく魔の物と呼ぶに相応しい強さである。

「案外苦戦しているようじゃないか」

下手に巻き込まれないように、遠巻きに様子を伺うコキラは思考する。彼らに対し体力の回復魔法を小まめにかけているとはいえ、三人が協力してやっと言った感じた。

「ミカサの魔法が持つかどうかだな」

コキラは冷静に状況を分析していた。

87・妖精のキッス

「ああ、魔力が尽きたわ……」

この戦いにおいて魔法は要なのである。それが尽きたと言つことは……ミカサは絶望の色を浮かべている。

「仕方ないな……」

コキラは、首をたれてうなだれるミカサの目の前に移動した。

「ミカサ……」

コキラはミカサに声をかける。

ちゅ。

突然コキラはミカサの唇に己の唇を重ねた。

「な、な？」

ミカサは赤面するも、自身に起きた変化に気がついた。

「な……なにこれ」

体内に良質の魔力が満ちているのだ。

88・キッスの効果

「ミカサに魔力あげたよ」

妖精は、魔素を吸収して魔力を排出する性質上、人工呼吸を的なることをすれば相手に魔力の補給をすることも出来るのだ。

「あと4、5回位ならあげることできるよ。だから、強い魔法でどんどんやっちゃえ」

（大きな魔力が消費されればそれだけ、おいらの好物がこの部屋に満ちる♪ 実際には7回でも8回でも、魔力が消費されて魔素が生産される限り、何回でも可能なんだけれど、とっても面倒なんだよね〜）

89・圧倒は威圧へ（ツキヨの飼主視点）

ワシは知っている。魔法生物を作り出すことに一生をささげているのだ、魔法についてはこの世界一と自負していいほどだとワシは思っている。

あの女魔法使いの放つ魔法は、強力だが消費が激しい。そろそろ、尽きる頃だろう。

思ったとおり……あの女の魔力が尽きたか。
ワシは勝利を確信した。

——しかし、数分もしないうちに、突然あの女が強力な魔法を連発し始めた。

おかしい。

どういうことだ？

計算にあわない。あわない。あわない。

90・仲間と力を合わせて

彼らは満身創痍になりながらも、戦いをやめなかった。

もう、何度攻撃を食らっただろう……？

もう、何度魔法を放ったことだろう……？

もう、何度斬りつけただろう……？

ミカサの強力な攻撃魔法を数発食らってなお、攻撃の意志を失わないツキヨは本物の化け物であろう。

しかし、体の一部がえぐられ、動きもだいぶ鈍ってきていた。

——やがて、その時がやってきた。

「これで、最後だ！」

イグチが、ミカサが、オウギが叫ぶ。

そして……

91・みつしゅんこんぷりーと

「ツキヨちゃんがやられたぞ。にげろ」

研究員たちは、一目散に逃げ出した。

「待てい！」

イグチとオウギは両手で近くにいた者の襟をつかむ。

「逃がさないわ！」

「おいらも」

ミカサとコキラは、魔法の縄を繰り出し逃げつけようとするとする人々を拘束した。

「あらかた片付いたか……」

「……そうだね」

この施設にいた主な研究者や幹部は捕らえた。あとは然るべき所に差し出すだけである。

「ミノムシも喜ぶような、ぐるぐるまきだね」

92・重要な証拠を探せ！

「……さて、これからある意味本題だ」

彼らはこの研究所で行われていたことを示す機密文書などを探し始めた。

「家探し、粗探しだ」

「ちがう、これはれっきとした調査だ！」

数刻後――

「なんか、いつぱい出てきたんですけど……」

重要そうな書類を集めただけで、山のようになっていた。

「どうやら、ここだけじゃないようだ」

魔物を人工的に作り出す組織は、思っていた以上に大きいようだ。

「……ひどくいい加減な計画だ……」

93・彼らの目的・彼らの妄信

魔法を使う源である魔力を何度も精製し、純度を高め濃縮し、最も純粋な魔力を持つかたちになった時、神にも匹敵する力が手に入るのではないか。それを思うがままに操ることができれば、世界を支配できる。そういう仮説の基この計画は始まった。

しかし、魔力を濃縮した結果できあがるのは、ゆがんだ魔力を持つ魔物ばかりであった。思うがままに操るところか、暴走しだす始末である。我々は、その失敗作を廃棄処分することにした……

94・魔物が増えていた原因？

「力を得ようとして、魔物ができてしまうなんて……碌な研究じゃないな」

資料を読み終えたイグチは、ため息をつく。

「魔物が増えているのは、これらの組織が手に負えなくなった『失敗したもの』の処理に困って、放っていたから？」

この悪魔の研究が魔物が増えていた原因だと、人間たちはそう確信した。

「おいしくないゴミの不法投棄だね」

コキラは変わらず毒舌である。

「そうだね……」

コキラもオウギもミカサも、肩を落とした。

95・しかし、妖精は世界を救わない。

（でも、魔物が増えた理由は『それ』だけじゃないような気がするけれどね〜）

人間たちが、集めた書類に夢中になっている様子を見て、コキラはそう思う。

（魔素から生まれた魔物も些細だけれど増えている。おいらにとつて、魔物のそのおいしさが変わらぬ限り、重大な問題ではないけれど。しかし、あの魔法生物は敵だ。しばらく人間たちには、魔物が増えたのはこの組織のせいだと思っていてくれた方が、おいらにとつても都合がいい）

96・妖精は時が来るまで人間に味方でいようと思う。

「おいらにとって魔物は、おいしいご飯。楽しい食事」

人の技術の進歩には目を見張るものがある。いずれは魔素の存在にも気がつき、魔物がどのようにして生まれるのかを知り、魔素が魔物にならない技術を作り出すかもしれない。

「いつか人間たちが魔物を絶滅させる危機になりえる時がくる。その時まで、おいらは彼らの味方でいるよ……」

そして、もう動くことのない機械を見下ろしながらコキラは目を細め、彼らの元へ飛んでいった。

97・強大な組織の影を追う

自分たちの探していた「魔物が増えた原因」である、強大な組織の影のしっぽをやつと見つけた。

「必ずこれらの組織をまとめ上げている奴がいるはずだ！」

「そうね、これは許せないわ！」

「地道な作業になるけれど、草の根をかき分けてでも、見つけ出さない……」

彼らのせいで魔物が増えているのだ。

「おいらも、おいしくないものが増えるのは嫌だからね」

「よし、がんばるぞ！」

それぞれの決意を胸に彼らはその研究所を後にした。

98・語られていく伝説

勇者たちの調査の結果、魔物を人工的に生み出している組織がたくさんあることが分かり、その組織が昨今の魔物増加の一端ではないかと報告された。国々の王たちは、その組織の未だなぞに包まれている首謀者を便宜的に「魔王」と名づけ、情報を募った。

勇者たちは、南に組織の影あらば飛んでいき、北に不穏な動きがあらば北上した。魔物を倒しながら、世界を飛び回る。

その勇者の傍らには、常にかわいらしい妖精の姿があったそう。

おまけ・簡単な人物紹介

■ コキラ ■

魔物を一口で頬張ることができる、食欲旺盛な妖精。

■ カノシタ ■

コキラの友人で、使い魔の走鳥。

■ イグチ ■

人間の男。

せかいをすくうゆうしゃさま。

■ ミカサ ■

人間の女。

凶悪な魔法で魔物を……

■ オウギ ■

無口な人間の女。

薬草とか弓術とか、そういう野外生活の技術を持っている狩人。

■ カヤ ■

ただ純粹に魔物の研究が好きな先生。

■ サクラ ■

悲しむ精霊に心を痛めていた精霊使い。

■ ツキヨ ■

人間が魔力で作り出した生物。

99・伝説の今……

今日も空は高く、太陽は光り輝き、大地は緑に揺れている。

「あ、魔物発見〜！ いただきます！」

コキラは魔物が目に付いたら片っ端から、食べている。

「いつもの事ながら、見事な……」

「相変わらずよく食べる子ね」

「なんだか、魔物のほうが哀れに見えてくるな」

青空の下、食欲旺盛な妖精のコキラは、走鳥のカノシタに乗って、イグチ、ミカサ、オウギの3人の人間と共に世界を駆け、魔物を食べまくりましたとさ。

めでたし&つづく？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1191p/>

キノコとようせい！

2011年7月23日03時30分発行